



東京家政学院大学 家庭科教育研究所NEWS

目次

刊行にあたって	1
ひろば	3
What's New	5
シリーズ「家政学を活かす」第1回	10
編集後記	12

刊行にあたって

東京家政学院大学家庭科教育研究所が発足して、6 カ月が経ちました。このたび、家庭科教育研究会会員のみなさまに、研究所 NEWS をお届けできることをたいへん嬉しく思います。

この NEWS では、研究所の活動や今後の予定をお知らせするとともに、会員のみなさまから寄せられた情報、家政学や家庭科教育をめぐる新しい動きなどをお届けしてまいります。定期的に発行し、研究所 HP にも掲載する予定です。

さて、いよいよ本格始動です。

私たちは、家政学・家庭科教育に関するさまざまな研究課題に取り組むとともに、勉強会や会員相互の交流、授業研究などを通して、家政学・家庭科教育を多方面から支え、互いに学び、育ち合う場をつくっていきたいと考えています。

入会は随時受け付けています。

家庭科教育研究所 HP「入会のご案内」からお手続きください。

本号の内容を少しご紹介します。

「ひろば」には、本研究所所長からのご挨拶を掲載しました。

「What's New」では、家政学や家庭科教育の研究・実践の場で生まれている新しい動きに目を向けます。第1回は、この春、東京家政学院大学の家政学を学ぶ学科に入学した男子学生たちへのインタビューです。彼らの声を通して、家政学・家庭科教育の今日的な役割について考えます。

そして、シリーズ「家政学を活かす」では、家政学を専門とすることが、その人の人生にどのような意味をもち、仕事やライフスタイルにどのようにつながっているのか、さまざまな領域で活躍されている方々にお話をうかがいます。第1回は、住生活・住教育を専門に研究されている岸本幸臣氏にご寄稿いただきました。

研究所 NEWS が、会員のみなさまと繋がり、語り合う場となりますことを願っています。

どうぞ最後までお楽しみください。

研究所では、みなさまからのご意見や情報をお待ちしています。

kateikaken@kasei-gakuin.ac.jp にお寄せください。



「家庭科教育研究所の活動に期待を込めて」

東京家政学院大学 学長
家庭科教育研究所 所長
鷹野景子

2026年4月、東京家政学院大学に家庭科教育研究所を設立し、家庭科教育や家政学に携わる学内外・国内外の皆様との交流拠点としての活動を開始することになりました。

東京家政学院大学は、創立者大江スミが1923年に立ち上げた「家政研究所」に端を発する教育研究機関です。家政学の草分けとして、100年以上にわたり家政学分野の教育と研究に先導的役割を果たし、研究者および教育者を多数輩出してまいりました。

本学は、長年、女子大学として歴史を刻んでまいりましたが、2025年4月の学部改組（生活共創学部の新設）の機会に、当該学部（町田キャンパス）を男女共学化し、翌2026年に千代田三番町キャンパスの2学部も合わせて、全学共学となりました。

女子大出身者である私は、女子大学の良さや存在意義について、極めて肯定的な意見を持っています。その一方で、家政学（生活科学）の学びを女子のみの学問に留めず、ジェンダーを問わずに広げたい、という思いが湧きました。私の専門分野は化学であり、家政学を専門としてはいませんが、家政学の学びや研究の内容を知れば知るほど、その思いは強くなったのです。

共学化に当たって、当然のことながら、議論がありました。様々な意見のある中で、共学化に踏み切りましたが、学内の教職員や学生、そして同窓会など、関係者に対する丁寧な説明と対話の機会を持ち、組織としての決断をいたしました。

本学が共学化する前に調べた状況として、家政学（生活科学）系の共学私立大学における男子比率は10%程度でした。本学の場合、2025年度に生活共創学部において25%の男子学生が入学し、さらに2026年度の全学共学化の結果、入学者の男子比率は前年同様25%となりました。

管理栄養士や栄養士、保育士や小学校教諭、建築士の道を希望する男子も多いのですが、予想以上に多かったのが、中高の家庭科教員を目指す男子でした。本号において、早速、家庭科教育に興味を持つ男子学生に登場していただきます。彼らへのインタビュー記事をどうぞお楽しみください。

以上、本学の状況を中心にご紹介しましたが、交流拠点としての家庭科教育研究所の設立は、家庭科教育の発展に資する有意義なものであると考えています。そして、研究所の主要な活動の一つが、「家庭科教育研究会」の運営です。「家庭科教育研究会（登録制、会費無料）」に入会いただき、ともに、経験や学びを深めてまいりましょう。研究者・教育者はもちろん、家政学や家庭科教育に興味をお持ちの皆様、高校生・大学生・大学院生、そして年齢やジェンダーを問わず、皆様の入会を歓迎いたします。

What's New



東京家政学院大学は、2025 年度から共学化となり、2026 年度からは全学部で男子学生が入学可能となりました。ここ千代田三番町キャンパスにも新しい風が吹いています。

2026 年 7 月、大学生活が始まってまだ 3 か月の、家政学を学ぶ 1 年生の男子 6 名が、インタビューに快く協力してくれました！彼らが在籍している現代家政学科は 4 人に 1 人は男子学生なので、自分が少数派だということは意識しないし、肩身が狭いとも思わないとのことでした。



東京家政学院大学の現代家政学科に入学した動機を教えてください、また、入学して 3 か月経った今、大学にどんな魅力を感じていますか。

母が管理栄養士だったので、幼いころから食育イベントなどに参加していた。食への関心から家庭科に興味を持つようになった。出身高校が単位制高校で、自分で授業を選べたので、食以外に保育や被服も勉強して、家庭科全般に興味を持つようになった。高校時代は授業には男子がほとんどいなかった。この大学は男子が少ないというけれど、高校の授業に比べたら男子学生が多く、似た分野に興味を持つ男子学生がいるので、みんなで勉強できるところがいいなと思った。みんなに会えて嬉しい。今は満足している。

中学校の時から家庭科の先生になろうと決めていた。進学する大学をいろいろ調べたら、男子で家庭科教員免許がとれるのは国公立大学といくつかの私立大学だけと非常に限定されていた。そのこと自体が驚きだった。今年から共学化したのでこの大学に来た。高校は普通科出身。大学に入って、家政の科目を多く学べて新鮮だし、自分の興味あることが学べている。タイミングよく東京家政学院大学が共学化してくれてよかったと思っている。もともと教員志望だったが、いろいろな教科の中でどの教科を専門にしようかと思ったときに、学んだことを生活のなかで活かすことができる家庭科にしようと思った。自分は、中学の時、勉強に関心がもてず、なんで勉強するんだというマインドだったので、同じように思っている生徒がいたら、「家庭科だったら

学校で学ぶことが大事なんだよ」と言えるし、「一番身近な家庭科なら教えられる」
と思った。将来は、高校で教えたいと思っている。家庭科は幅広いので、高校で家庭
科の研究活動をして、その中から自分の興味ある進路に進む生徒がでてきたらいいな
あと思う。

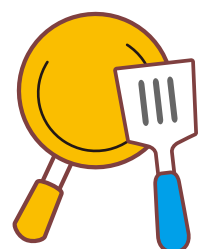
もともとスタイリスト志望で、進学先は服飾の専門学校に決めていた。あるとき、服
のリメイクをしていたのだけれど、自分の家にはミシンがなくて、高校の先生にミシ
ンを貸してもらった。先生が親身に対応してくれて、その時「先生って、いいなあ」
と思い、急遽大学の情報を調べて、家庭科の教員になれるこの大学に来た。高校の家
庭科の先生は生徒のことを一番に考えてくれて、授業は信念を持ってやっており、人
として魅力のある先生だった。

小さい時から自分はしゃべるのが好きなので、しゃべることに直結する仕事はなにか、
自分は服が好きだからそれも諦めたくないと思っていた。家政全般をやって服のこ
とも学べるのが魅力だと思った。大学に入ってみると、思っていたより座学が多いので、
そこにギャップを感じている。将来は高校教員になりたい。

幼いころから教員を目指していた。AI に仕事を奪われたくないと思っていて、教員
なら AI に仕事を奪われることはないだろうという理由で教員を目指している。小さ
いころから、洗濯や料理、裁縫ができたので、家庭科の教師になりたいと思った。中
学校くらいからは、周りに自分で生活できない友達がいたので、社会に出ても困らな
いように家庭科を教えてあげたいなと思うようになった。自分は、両親が教師で、母
親が毎朝、朝ご飯を作ってくれていたのだけれど、いつも、おにぎりとういんナーと
フルーツとスープだった。それで「飽きた」と言ってしまったら、母親が怒って「そ
れなら自分で作りなさい」と言われた。それで小学校1年の後半ぐらいから、全部
自分でやるようになった。おかげで、自分の身の回りのことは自分でできる。
家庭科は社会全体のことを学べるからいいなあと思う。将来は高校の教員になるこ
とを希望している。

もともと数学が好きだったので数学教師になりたいと思っていた。高3の時に、教
師になって自分は何を目指しているのかを考えたら、数学だとただ教えることしかで
きないなと思った。それならほかの科目でもよいじゃないかと他の教科にも関心が向
くようになった。受験と同時にぼくは株式に力を入れていた。

今、日本では消費経済が貧しいし、若者の貯金も減っている。教育現
場で若者がもっと経済に興味を持って、金融を知ることが大事だ
と思った。家庭経済の分野で、例えば NISA とかを生徒たちに教えれば、
10年後とか生徒たちが僕に感謝してくれるのではないかとあって、
家庭科教員を目指すことにした。将来は高校教員になりたいと思う。



小学校から中学校ぐらいまでは保育士を目指していた。姉に憧れを持つことが多くて、姉が国語教員になったので自分も教員になろうと思った。最初は理科にしようと思ったが、自分は数学が苦手な物理もできない。コロナの自粛期間中に料理をしていたし、中学でも家庭科部に入っていたので、それなら家庭科をやろうと思った。どこの大学にいくか、ずっと探してやっとこの大学を見つけた。今は勉強が難しく、テストの点数がとれないのが悩み。



家政学は女性の学問とか、家庭科教育は女子が得意というような固定的な誤った考えを持っている人も多いと思うけれど、皆さんが現代家政学科を選択する際にそういう圧力みたいなものは感じなかったですか。

家政学を学ぼうと思って、自分が学べる大学を調べたときに、家政学を学べるのは女子大、男子を受け入れているところはあまりにも少ないことが分かり、そこで初めて家政学は女子優位というジェンダーに気づいた。

教員免許だったら教育学部の大学には家庭科があり、そこで男子も学べるけれど、男子が学べる家政学部、家政専門がないことはおかしい。

高校でも普通に男子も女子も家庭科をやっているのだから、女子だから家庭科という考え方は今の世代の我々にはないと思う。

家政学は女の学問だとは思わない。家庭科は生活するのに必要なもので、男女分け隔てなく学んだほうが良いと思う。

ぼくは中・高の家庭科教員志望。自分は家庭科が好きだし、数学など他の科目よりも家庭科は明らかに自分の生活に関わることを教えられる。中学・高校なら自分が教えたことが、そのまま生活や生きることにつながると思う。

自分は大学に入ってから周りの人の偏見に気づかされた。「大学どこに行っているの？何やっているの？」と尋ねられて「家政学」というと、ちょっとビックリされることが多い。そんなにびっくりすることかなあと思う。進路選択の時には全然そういうものを感じたことはなかったのに。





家庭科の先生になったら、子どもたちにどんなことを教えてあげたいですか。

家庭科では、経済への興味関心が少ない。自分も高校の家庭科の授業で金融をしっかりやった記憶がないので、そこを変えたいと思っている。沖縄では部活で実際に株投資をしたりしている。そうしたことが全国に広がるといいと思う。生活に身近な家庭科だから、社会科ではなく、身近な家庭科の中で金融経済を教えたい。

家庭の経済的安定についてもしっかりと学ばせたい。子どもが大学に進学したいと思っても家の経済状況で叶わないこともある。そういうことがないように、家庭科で経済について勉強することが大事だと思う。

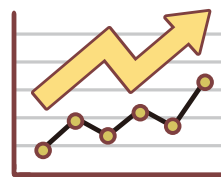
家庭科で扱う内容が増えている。高校の授業では、地球環境まで広がっている。学ぶ内容はどんどん増えているのに、家庭科の授業時間数は5教科よりも少ない。時間数の少なさが問題だと思う。

ジェンダーに関わることが一番問題だと思っている。男子はこう、女子はこう、と決まりを作るのは今の社会には適していないのに、まだ残っている。自分で選ぶ選択肢の幅を広げて活躍できるようになったらよいと思う。その人がやりたいことを極められる社会にしたいと思う。男性の自分が大学で家政学をやっているという、驚かれることが多い。法制度を整えること、偏見をなくすことが必要だと思う。

自分もジェンダーに関することが重要だと思う。僕は、かわいいものが好き。女子と好きなものをいっしょにやっていると、男子なのにと、まわりに受け入れられなかったことがある。周りにはまだ理解がない。そこを変えたい。

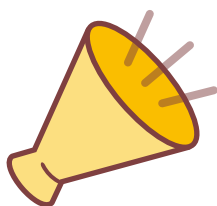
AIが発達してきた。今の子どもたちが考えることをやめないように、使い方を学ぶ必要がある。消費者トラブルにもAIが使われているので、その対応が必要だし、使い方をしっかり教えたい。

高校で選択した授業は実習が多くて、実習が好きだった。でも、「家庭基礎」の座学は、自分のなかに残っていないし、面白くなかった。実習の方が記憶に残っている。とくに保育は、近所の保育園で実習をしてためになった。実習をたっぷりできる家庭科をやりたい。



最後に、これから入ってくる後輩男子学生のために、大学への要望も寄せられました。

「トイレの待ち時間が長い。今の1年生の人数だけで困っているので、来年度以降男子学生が増えたら大変。」「女子はロッカーは2階、そして体育館も2階にある。一方、男子の場合、男子ロッカーが地下、体育館は3階、トイレも3階なので、動線が悪い。」「机の高さが低い。机と机の間隔が狭くて、足が入れ込めない。そのために毎回



机をずらさなければならないのは、まわりの女子学生にとって迷惑になる。」「調理実習や被服実習の台の高さが低いと腰が痛くなるのではないかと心配。」と、様々な環境上の課題を浮き彫りにしてくれました。どれも当事者だからこそ気づけること、とても貴重な指摘です。大学も、早速、改善に向けて動き始めています。

インタビューを終えて

千代田三番町キャンパスを颯爽と歩く男子学生に出会う度に、100年を超える女子教育の歴史に、初めて男子学生として新たな扉を開いた彼らは、どんなことを考えて家政学を学ぼうと思ったのだろう、女子大学に入るという覚悟はどんなものだったのだろうと、その内面に大きな関心を寄せていました。

インタビューで語ってくれた彼らの話は、良い意味で、私たちの予想を心地良く裏切ってくれました。彼らの中には、男子だから特別という気負いは微塵もありませんでした。純粋に、それぞれのやりたいこと、自らの学びに向き合っていました。私たち大人社会は、いつ、この純粋な視界に、固定観念や枠組みを押し付けてしまうのでしょうか。自分の中に、1ミリでも間違った思い込みがあるなら、すぐにそれを取り去ろうと誓いました。

彼らの話を聴きながら、小中高等学校の一貫した男女共修家庭科が、彼らの人生の中にしっかり生きていることを、たいへん心強く、嬉しく思いました。このまま、何にも縛られることなく、のびのびと自らの目標に向かって歩んでほしい、そう願わずにはいられませんでした。

家庭科教育研究所の活動への激励ももらいました。家庭科教育研究会にも入会してくれました。これから一緒に活動ができることを楽しみにしています。

シリーズ「家政学を活かす」

第1回



このコーナーでは、家政学を専門とすることが、その後の仕事やライフスタイルにどのようなにつながっているのか、さまざまな領域で活躍されている方々にお話をうかがいます。第1回は、住生活・住教育を専門に研究されている岸本幸臣氏にご寄稿いただきました。

「家政学を活かす」私の場合

大阪教育大学・羽衣国際大学名誉教授

岸本幸臣

1. 私と家政学・家庭科教育との出会い（父母の子・自明の結果）

・父は私が4歳の時に他界し、母は戦中・戦後の厳しい生活の中で教員として私と姉を育ててくれました。建築家だった父の影響もあり、母は当時としては珍しく建築や住居に理解のある家庭科の先生だったようで、機能派建築だとか今和次郎という言葉は、大学で学ぶより前に、私は母から聞かされていました。また、戦前の家庭科教育が、「忠君愛国」「学徒勤労奉仕」を掲げて、本当の生活の理念を歪がめ、教え子達に質素倹約を強いて戦争に駆り立てたことへの自責の念が強い人でした。その意味では、「建築家」×「家庭科教員」×「戦前教育の反省」＝「家政学・住居の研究者」×「本当の生活の豊かさ追究」となり、私と家政学・家庭科教育との出会いは自然な成り行きだったと思っています。

2. 私の科学観（住居・家庭科教育から家政学へ）

・大阪市立大学の家政学部と院（修士課程）では住居学を学び、「生活の場としての住居」の知見を育くまれました。当時は、大阪市立大学だけが男子が入学できる唯一の家政学部でした。博士課程は京都大学大学院建築学専攻でした。工学系でしたが、西山卯三先生を中心に「生活者の立場や社会的存在として住まいを捉える」という視点に立ち、住居学研究では日本の中核的存在でした。幸いこのような環境で、生活者目線で住居を捉えることの意義を学びました。

・大学院を終え大阪教育大に就職し、家庭科教育や住居学の講義と研究に専念しだして気づいたのは、自分は家政学原論を本格的には学んで来なかったことでした。私が大学生だった昭和 30 年代、家政学原論はまだ揺籃期でした。

今ふり返ると、大学時代に家政学原論を本格的に学べなかったことが、逆にその後の研究生活で原論に強い興味関心を抱き続けるきっかけになったともいえます。

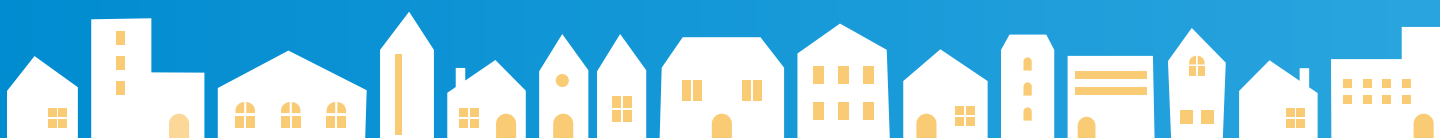
・丁度その頃、『成長の限界』という本が世に出ました。当時社会は、高度成長・科学技術万能の時代でした。でも、どこかに破綻の危惧を感じていた私にとって、この一冊の本は覚醒の出会いでした。大量生産・大量消費、果てしない需要の喚起とそれに応える際限のない技術の進化。その結果としての環境破壊や資源枯渇の地球規模での拡大。しかも、この果てしない欲望の原点に、私たちの「豊かな生活追究」があるのなら、危険な暴走的成長を抑止し制御する責任は誰よりも家政学に問われているのではと思えたのです。

3. 家政学論（サイバネティックス機能・最適な豊かさとは）

・家政学は近現代に入って、科学の視点からの考察を深め、課題解決への提言をしてきました。即ち、これまでの家政学は「生活の科学化」を重要な考察視点として学の独自性を発揮してきたと言えます。しかし、よりよい明日への努力が結果的に社会全体の矛盾激化を惹起しているのだとすると、科学・技術の無際限な成長や発展を制御し、調和のとれた発展に戻す責務が、これからの家政学には問われます。「生活の科学化」から「科学の生活化」へのフレーズの転換は、そのことを指しています。また、私たち人間には成長や発展を、持続可能なものへ糾すために「持続性のある明日につながる豊かさ」に制御しようとする必然的動機があります。これが家庭生活に内在する重要なサイバネティックス機能だと言えます。

・生活者は家族や隣人、地域や社会、生態系等と調和のとれた課題達成に本当の豊かさを求めています。国際家政学会が 2008 年の「21 世紀の家政学」で述べている「Optimal and Sustainable」（最適で持続可能な）の理念は、それを端的に言い当てています。

・その意味で「本当の豊かさとは？」、それを見抜く力を家庭科教育が育んでくれることを、一家政学徒として心から期待しています。



編集後記

家庭科教育研究所 NEWS 第1号をお届けすることができました。これから会員間の対話の場として、また、研究所の活動成果を発信する場として、定期的な発行を目指していきます。どうぞよろしくお願いします。

この原稿を書いている今、次期学習指導要領の改訂に向けて、学校教育は大きく動いています。家庭科教育にとっても、これからの10年の骨格がつくられる重要な時期です。今回の改訂に向けた議論では、中学校の「技術・家庭」を「家庭科」と「情報・技術科(仮称)」の二つの教科に分離する方向が示されました。実現すれば、小学校から中学校、高等学校へと「家庭科」の名を掲げた教科がつながる、大きな転換となります。子どもたちの発達を見通しながら、家庭科で何を学び、どのような力を育てるのか。私たちは今、あらためてそれを問い直す地点に立っているのだと思います。

次期学習指導要領に向けた議論では、「生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自らの人生を舵取りすることができる、民主的で持続可能な社会の創り手」を育むことが掲げられています。とても大きな目標です。子どもたちだけではなく、日本社会を生活しているどのライフステージにある人にとっても、未だ達成し得ない人生の希望のように読めます。

私たちが、「自らの人生を舵取りし、そのことを通じて持続可能な社会の創り手」ともなるためには、相容れない考え方も含めて、社会の中にあるさまざまな価値に出会い、そのなかで自分は何を大切にするのかを考えていく経験を重ねることが必要なのだと思います。家政学が追求してきたのは、個人、家族、コミュニティ、そして社会、それぞれの生活主体にとってのよりよい暮らしを求めながら、同時に社会全体の持続可能性を考えることです。そこでは、異なる価値や立場の間で考え続けることが求められます。一人ひとりが生活者としての経験を豊かにし、自分の眼で生活のなかの課題を見つけ、生活する主体としての力に基づく揺るぎない意思決定を重ねていく。その先にこそ、これからの生活と社会への展望がみえてくるのではないのでしょうか。研究所のモットーである「生活の視点から社会を変える」には、そんな願いを込めています。

このNEWSもまた、何を問い、何を大切にし、どのような未来をつくっていくのかを、みなさんと一緒に考える場にしていきたいと思っています。

明るい未来は、日々の生活のなかから私たち自身がつくっていくもの。そのための問いを、このNEWSから発信し続けたいと思います。

編集 工藤由貴子
家庭科教育研究所 特別招聘教授

